

佐藤 美穂子

公益財団法人日本訪問看護財団 理事

“訪問看護の生き証人”として、 在宅ケア制度の充実・推進に寄与



佐藤 美穂子
Mihoko Satoh

公益財団法人日本訪問
看護財団 理事

1972年、県立高知女子大学衛生看護学科卒業。同大学助手。1973年、東京白十字病院へ入職。1982年、川崎市高津保健所にて保健師として訪問指導に従事。1986年、(社)日本看護協会訪問看護開発室入職。訪問看護等在宅ケア総合推進モデル事業の支援に取り組む。1995年、厚生労働省へ入省。訪問看護に関わる行政施策の普及推進に努める。2001年、(財)日本訪問看護振興財団(現財団)に入職。2002年、常務理事に就任。認定看護師(訪問看護分野)教育課程の開講や、療養通所介護制度の創設・推進にあたる。東日本大震災では、仮設住宅住民への健康支援活動を行う。2014年、「訪問看護アクションプラン2025」の策定に尽力。2020～25年、超高齢多死社会を見据え、訪問看護師向け在宅看取り教育プログラムの開発・普及に携わる。

推薦者 清水 嘉与子 公益財団法人日本訪問看護財団 特別顧問
南 裕子 神戸市看護大学 名誉教授

英国で体験した訪問看護を日本でも

わが国の「訪問看護」黎明期から、制度設計や普及、教育活動などに尽力してきたのが佐藤美穂子氏だ。

日本で訪問看護制度が創設されたのは1991年のこと。佐藤氏が入職した東京白十字病院では、遡ること21年前には、既に訪問看護活動が始まっていた。佐藤氏は同院への入職前、総婦長の家に泊まり込んで、訪問看護の可能性と魅力について一晩中語り合ったという。その後、夫のロンドン赴任に伴い退職。佐藤氏は現地で長男を出産する。退院後は、授乳がうまくいかない氏の自宅へ、NHS(国民保健サービス)から派遣された訪問看護師が、毎日2回来てくれた。この時の手厚いケアの体験が、日本での訪問看護普及への思いにつながっていく。

1986年、日本看護協会の訪問看護開発室へ入職。在宅ケアを推進するために、訪問看護師の教育プログラムの作成や一般向け介護相談などを行う。NHK教育テレビ「すこやかシルバー介護」にも出演し、介護技術の普及に努めた。1992年、老人訪問看護制度スタート後は、看護師が訪問看護ステーションを開設・運営する際の経営管理者研修や交流会、「開設・運営・評価マニュアル」の作成など、訪問看護を事業として行っていくための支援事業を矢継ぎ早に行い、さらに1994年の日本訪問看護振興財団設立に向け、奔走を続けた。

緑の下の力持ちとしての23年間

1995年には日本看護協会会長の推薦により、訪問看護係長として厚生労働省へ入省。一貫して訪問看護に関わる行政施策の普及に努める。訪問看護にまつわる診療報酬改定作業では、“午前様”の帰宅もあったという。

2001年、日本訪問看護振興財団へ入職。翌年には唯一の常務



2011年5月、第177回衆議院厚生労働委員会において、介護職員の喀痰吸引の安全性と、訪問看護師を増やすための対策を意見陳述した。

理事に就任する。以降2005年には、認定看護師(訪問看護分野)の教育課程(6カ月集中コース)、2008年からはe-ラーニングを導入し、訪問看護師の育成を行う。2006年には、要介護者を対象とした通所サービスを提供する「療養通所介護」の普及に取り組む。

2011年の東日本大震災では、仮設住宅住民に対して健康支援活動を展開。1年目は日本財団から資金提供を得て全国から志願した看護師等がケアにあたり、翌年からは名取市の委託事業として地元看護師等が支援活動を展開した。“絶対に孤独死を出さない”を合い言葉に、仮設住宅が役目を終えるまで、およそ2,000名の住民に寄り添った。

その後も、超高齢多死社会を見据えた、訪問看護師の「看取り」教育など、訪問看護の質向上と、コロナ禍における訪問看護師の支援など社会課題解決のために駆け回る。

「日本訪問看護財団での23年間は、まさに緑の下の力持ちだった」と佐藤氏。わが国、“訪問看護の生き証人”としての足跡は、未来への確かな道しるべとして燦然と輝き続ける。



東日本大震災、仮設住宅住民への健康支援活動では、部屋に閉じこもらないよう、集客会で脳梗塞の早期発見などのセミナーも開催した。